に分け得るが、後者に於ては更に、國學者傳記集成の如く列傳的な研究があり、近世文化の上に之を精神史的に取扱はんとする方法があり、更には又神道史の立場からするものがあり、國民道德史の中に之を織込まんとするものもある。

此書は著者が從來諸種の雜誌其他に發表した論文を中心として長年の研究の成果を一書にまとめたものであつて、第一章に於ては主として契沖より宣長に至る國學の發展的な經過を、第二章に於てはそれらを通ずる國學の諸傾向、例へばその實踐的傾向や文獻學的研究等を、而して第三章には國文學との關係に就いて述べて居る。

而してこの研究に見られる一つの特色は著者も自ら述べて居る如く、今日の國文學の母胎としての國學を考へんとした點に存するであらう。即ち國學に於ける國語學研究の問題、國學と文獻學等の問題を中心として、單に國文學との關聯に於てのみならず、思想史的な考察を進めてゐる。更に第四章に於て書史的研究をまとめ、從來の國學史研究書の解說、國學の傳統に就いての簡單な略圖を附してある。尤も國學の近世的な意義に就いての歷史的な考察、例へば中世學問との關係、殊に國學者の中世觀（これが國學の古代研究、古典研究の方向を決定するものと考へられるが）等に就いての考察が殆んどなされてゐないのは物足らぬ點もある。しかし乍ら國文學の立場からする組織的な國學の研究として新生面を開くこと多く、穩健にして且創見に富む國學研究の好著であらう。（本文四一二頁、附表―國學傳統略圖、著者論文目錄、索引計一〇頁、至文堂發行、定價四圓）（淸原宣雄）

支那社會史

――支那地理歷史大系第七編――

本書は白揚社が現在刊行中の支那地理歷史大系十卷の內の一卷である。執筆者は四人で、古代南北朝を岡崎文夫博士、隋唐五代宋を那波利貞博士、元朝を有高巖博士、明淸民國を小竹文夫氏が書いて居られる。

この大系はその篇目を見た所では富山房の支那歷史地理叢書とは違つていくらか體系的になつて居て全體としては統一ある如く見えるが、その代り一卷の中に數人の執筆が割り當てられて居て一卷々々の中では餘り統一がある樣には思はれない。この事は私が最近讀んだ本大系第四編の「支那政治史(上)」でも感じた事だが、この支那社會史に於ても大體同樣である。唯本書では叙述の繁簡が執筆者によつて異ること「支那政治史」程ではないし、取り扱はれて居る問題の範圍も「支那政治史」程區々ではない。政治史の場合では例へば軍事外交は政治史の中に入るかどうかさへが人によつて違つて居た程度であるのに對してこの社會史ではそんなにひどい見解の相違は見受けられない。

四人の執筆者の內、有高氏と小竹氏の二人は社會史といふものに對して相當はつきりした概念を持つて居られる。殊に有高氏は社會史研究の立場として社會組織、社會生活、社會問題、社會政策の四つの觀點を明確に擧げ、その觀點から叙述を進めて居られる。小竹氏は全重心を階級問題に置き之を種族關係、政治關係、

經濟關係、社會生活の四つの見地から項を分けて述べて居られる。

岡崎氏は自分は社會學を修めたことがないから社會史を書き得ない。それで文化史の流の中に主として其社會面を叙述することにすると言つて居られる。之もその立場ははつきりとして居ると言はなければならない。事實岡崎氏の文は社會の概念こそはつきりしないが社會史の諸問題をば最も多く含んで居り、從つて氏の企てはこの意味で一應成功したものと言へると思ふ。

那波氏の文は概念といふ點からすれば漠然不明確であるかも知れない。その代り史實は一番豐富である。殊に、一般讀者にとつては或は興味がないかも知れないが、多くの根本資料を煩を厭はず擧げてあるのは專門家にとつては有難い事で、それによつて益する所少くなからうと思はれる。

社會學乃至社會史に就ては私も全く素人である。從つてこの支那社會史をどうかういふ資料は私には全くないといつていい。ここで私が言ひ得るのは單に一般讀者としてだけである。そんなら一般讀者として支那社會史にどんな事を期待するのか。

先づ第一に支那の社會は我が國や歐米諸國と比べて大分複雜怪奇なものであるらしい。その狀態を出來ることなら怪奇でなくはつきりと知りたい。尙出來ることなら現在かくあるに至つた由來をも知りたい。之が私が支那社會史の本に期待する最も素朴な望である。この望は本書によつてたしかに或る程度迄滿たされ得た。

次に私は自分の現在住んで居る社會に色々不合理な點を感じて居る。例へば因襲と呼ばれるものの不當な强力性に疑問を持つて居る。かういふ不合理の由來がはつきり說明される事を、少くとも說明のヒントを得る事を社會史に期待する。この點に關しては本書によつて私は何等新しきを加へることが出來なかつた。

第三に私は現在自分が未だ無自覺で居る所の社會の不合理を社會史を讀む事によつて新に自覺させられ、それによつて自分の社會に對する理想の形がいくらかでも變るに至ることを期待する。この期待は本書によつて間接的に多少報ひられた。といふのは一つは、同じく社會史を書かうとしながら人によつてかくも違つたものが出來るといふ事實——その人々の間のギヤップの中に、及び自分との間のギヤップの中に問題がひそんで居るかも知れないと氣付いたのである。そこで私は更に社會學の入門書の一つを試みに繙いて見た。所がその社會學の本とこの社會史との間には又々もつと大きなギヤップがあることを見出して驚いた。その結果次に第四番目に私が社會史に期待すべき事がそこから出て來たのである。現在の社會學を改變する樣な社會史こそ出づべきであると。

例へば私の讀んだ社會學の本には、階級とは一定の社會的勢力を有する人々の一集團とそれを有たない人の一集團をいふ。而して社會勢力とは或る特定の服從把握の手段を有する人が他の人々の服從を吸引することによつて成立する集團勢力である。といつた樣なことが書いてある。そしてその服從の手段として一武力、

二寅、三個人的才能の三つが擧げてある。一方「支那社會史」では私は門閥の力や民族の相違による階級性のあることを強く教へられた。門閥とか民族とかは明かに上の社會學の階級の定義に當てはまる。而もこの二種の階級は上の三つの服從手段だけでは解釋し切れない服從手段を持つて居る場合がある樣な氣がする。この場合社會學は一歩讓つてその概念を組立て直すべきだといふ氣がするのである。

これは私の思ふには社會史が無自覺に社會學に挑戰した一例なのだが、更に一歩進めて意識的に社會學を、延いては一般人士の社會の諸觀念を更改する如き社會史が作られてはどうかと思ふのである。それには無論社會史を作る側でも社會學を一通りは知つて居る必要があることはいふまでもない。

尙この支那社會史を讀み了つて一寸不思議に感じたのは支那の家族制度に就て殆んど書かれて居ないことである。岡崎氏が一寸觸れて居られるだけである。集團としての社會の問題、卽ち階級や地方自治團體の問題は全卷を通じて遺憾なく論ぜられて居るのに、社會の構成單位としての家や家族制度のことは社會史の問題にならないのであらうか。この事は大體執筆者四人全部に共通して居るだけに尙更私には不審に思はれたのである。（昭和十六年一月、白揚社發行、四六版三九一頁、價參圓）（內藤戊申）

長安の春

石田幹之助著

これは著者がかつて雜誌・論叢に發表せられた論稿のうち、唐代の文化に關するものが集められた論文集であつて、收むる所は一、長安の春・二、「胡旋舞」小考・三、當壚の胡姬・四、西域の商胡重價を以て寶物を求むる話・五、再び胡人採寶譚に就いて・六、隋唐時代に於けるイラン文化の支那流入・七、長安盛夏小景の七篇である。本誌に載せられた「胡旋舞」小考をはじめとして、いづれも以前に發表せられたものばかりで、內容もよく知られ、價値も立派に認められてゐるものばかりだから、どれも加筆補訂が加へられてはあるとはいへ、今更こと新しく紹介する必要もないかと思はれるけれども、いま編輯者の命もあり、中には此の本ではじめて私の見たものもあり、さうでなくてもかやうに一册の本になつたのを見ると自然新たな感興も加はり、敢へて蕪辭を列ねて紹介をする次第である。

「長安の春」は、もと杜邨生の筆名で「ドルメン」の創刊號（昭和七年）の卷頭を飾つてゐたものである。――この創刊號には、これにつゞいて故濱田先生の處女飛行の記や、連載せられた淸野博士のものとか金關博士の飜譯の第一回分などがあつて、記憶に殘つてゐる號である。內容は、題名の示す通り、春の長安の風物が述べられたものであつて、唐人の詩文を巧みに配し、美しい筆致で以て、花の長安の榮華の樣があざやかに描き出されてゐる。